

---

# Aggressive War

藤本 泉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Aggressive War

### 【NZード】

N9573Z

### 【作者名】

藤本 泉

### 【あらすじ】

2024年、世界が終末を迎えた時世界中がアグレッサーと呼ばれる地球外生命体に襲われ、滅びを迎えるようとしていた。これは、滅びと希望の物語。

## プロローグ　0話（前書き）

面倒臭い言い回しが多いかもしませんが、気軽に読んで頂けると嬉しいです。

## プロローグ　0話

一〇一四年九月五日午前三時二十四分（グリニッジ標準時刻）  
世界主要都市アメリカ合衆国が、正体不明の生命体【アグレッサー】によって占領されるという事件が起きた。

どうして、そんな事態に陥ったのか？

私は事件の謎について、長年追い続けているしがないライターだ。事件発生から数年、数多くの資料書物を漁り、数多の研究機関を訪れ、必要とあれば戦火の中でさえ飛び込んできた。だが、その苦労は虚しく、この記事を各一週間前までは、先の見えない謎に半ば絶望を覚えていた。

だが、この記事を書く一週間前とある情報が私の耳に届いた。私の噂を聞きつけてか、有力な手掛かり持つ者が現れたのだ。私は直ぐさまアポを取り次ぎ、情報提供者が暮らしている日本の首都である東京へと足を運んだ。

そこで私を出迎えたのは、独特な雰囲気を醸し出す四十過ぎの男性であった。彼は今さつき体験してきた出来事を話すように、私に語つて聽かせた。

事件発生から遡つて十年前。

アメリカカワシントンD・C州に位置し、世界最大規模を誇るアメリカ航空宇宙局。彼はそこの一研究者として務めていた。膨大な仕事量に普段から慌ただしい毎日を送っていたらしいが、その年の八月一日だけは別格だった。【NASA】にいる誰もが自身の仕事より、たつた一つの結果を優先した。

無人宇宙探査機ボイジャー一号が、ヘリオポーズから脱出する瞬間を迎えるようとしていたからだ。

ヘリオポーズとは、太陽風が星間物質や銀河系の磁場と衝突し、完全に混ざり合う境界面である。端的に言えば、宇宙空間の境界線

上を表す用語である。そして現在、地球から最も遠い探査機であるボイジャー一号は、太陽系を飛び越えた先へと進もうとしていた。誰もが、人類の新たな一步を見ようとしていたからだ。

彼もまた、その大勢の内の一人に過ぎなかつた。眼前に鎮座する超大型モニターを、一心不乱に見つめ続けていたのだと言つ。その時は、誰もが成功の期待と失敗の不安の狭間で揺れていた。

だが、問題は発生した。

突然、周囲が騒がしくなつたと思い、近くにいた同期に話し掛けようとしたところ、鼓膜が破れそうなぐらいの甲高いアラーム音が鳴り渡つた。それが一級緊急非常事態を知らせる警報であることを理解するには時間は要さなかつた。

原因は直ぐに、彼の耳にも入つた。

ボイジャー一号の損傷だ。

正体不明の物体と激突し、機体に多大な損傷を負つてあり、その機能を完全に停止したとの連絡が入つたからだ。

だが、ここで考えて欲しい。

ボイジャー一号にもまた、周囲を索敵する様々なセンサーが取り付けられていた。というのに、そのセンサーが反応しなかつたという不可思議な現象に。

そして、事件発生から十年後。アメリカ全土を包み隠した謎の浮遊物体とアグレッサーの関係性について。

その時、私は、彼が伝えようとしていたことの意味を理解した。彼はこう言いたかったのだろう。この三つの事件は、全く関係ない出来事ではないのかもしないということを。

ボイジャー一号は事件発生の十年前、既にアグレッサーと接触していたのではないのだろうか？

偶然にも、彼等の宇宙船が接触した探査機を破壊し、十年の歳月を経て生命維持が可能な地球へやつってきたのではないだろうか？

そして、地球を占領したのではないのだろうか？

推測の域を出ないこの疑問を解明するために、私はこれからも調

査を続けようと思つ。

(一〇三五年に死去した仁田氏の遺した日記より抜粋)

仁田結衣は、今までに何度も読み返し、皺の出来た古びた雑誌をそつと閉じた。この雑誌には、一年前の事件で他界した父のことが記載されていた。父親はフリーのライターで、アグレッサーと呼ばれる地球外生命体を追いかけていた。

今から十年前、アメリカロングアイランドにて突如出現した正体不明の浮遊物体。それは地球に地球外生命体が訪れたことを示していた。ただ、彼等が乗ってきたのはマンガや洋画等に存在するような円盤の形状ではなく、意識を持つた機械の集合体だった。

アグレッサーの宇宙船は、アメリカ全土を包み隠すほどの体積があり、当時のアメリカは太陽が当たらない暗黒世界と化していた。そして、十年前の九月五日。

宇宙船より無尽蔵のアグレッサーが降下し、たった数時間の内にアメリカ力を支配するに至るという事件を起こした。

当時、国際連合の名の下に、世界中の国々が軍事力を集結させた。だが、アグレッサー陣営の圧倒的な戦力の前では、例え戦闘訓練を受けたプロの軍隊といえども、状況を巻き返せるだけの力は無く、ただ人間側の犠牲者だけが増え続けていった。

それから十年後。

世界の約八割がアグレッサーの支配下に收められ、日本も東京を除く全ての土地を占領された。

そもそもの話。アグレッサーの核を構築する金属、【水晶金属】は、地球上に溢れる鉄、銅、亜鉛から希少金属である金、銀、バナジウム等とは全く性質が異なる。

水晶金属は耐久性も優れていることながら、何よりも注目すべき点は、人間で言う所の言語機能、神経を兼ね備え、生命維持活動を行ふことを可能にする意思を持った金属ということだろう。自律的な活動は勿論のこと、ただ闇雲に暴れまわるのではなく、個々が目

的を持つた行動を起こすのが確認されている。これは、人間でいう所の脳に近い役割を果たしていたのだ。

彼等がただ無能に、純粹に暴れ回るだけならば幾らでも手の打ちようはあつたのだろう。しかし、アグレッサーは互いに情報を共有し、緻密な作戦の上で行動することにより、より確実性を増した侵略を可能にしたのだ。

そうして、十年経った現在。人類は、再び地球の支配権獲得の為に、アグレッサーと戦争を継続している。

現在の日本は、元々の少子化の影響があつたのか定かではないのだが、人員不足問題が深刻化している。

特に人員の減りが激しいのは、生死の危険性が最も高いアグレッサーと戦う【ユニット】達である。そのような風潮があつてか、学生の内からアグレッサーと対峙する為、戦闘技術を学べる白羽学園が建設された。

仁田結衣もまた、白羽学園の第一期生として学園に通っていた。

「……あっ、もうこんな時間」

結衣は掛け時計を眺めると、時計の針は八時を過ぎていた。私がぼんやりしている間に、時間が大分過ぎていたようだ。いそいそと鞄に自作メイド・パーソンNPCとスマートフォンを突っ込むと駆け足で家から出でいった。

「はあはつ」

黒谷湊は荒い息を吐き出しながら廃都市を疾走していた。黒を基調としたファスナー式の上衣に、同色のカーボパンツと厚底ブーツ。腰にはピストルベルトが巻かれ、背中にウージー、両手にはファイアセブンが握られている。

「相手はたつた一人だ。回り込んで追い詰めろ」

誰かが声を張り上げた。

黒谷は即座にファイアセブンをガンベルトに収納する。

代わりにM67 破片手榴弾を取り出すと、安全レバーに取り付けられているクリップを外すと、安全ピンの先をまっすぐに戾す。人差し指で安全レバーを押さえ込み、安全レバーを引き抜くと同時に、声の発生源へと向かつて投げつける。

「一、二、……五秒後。爆発音と共に、複数の悲鳴が聽こえてくる。同時に、腰に手を回してウージーを構える。安全装置を解除すると、姿勢を低くしたまま敵がいる方向へと駆け出す。

T字路を右折すると、敵の有無を確認するよりも先に引き金を引く。毎分六百発の発射速度で9×19?パラベラム弾が射出される。「うわあああ」、「がああああ」

丁度、Tの字を左折しようとしていた二人組に出会い、彼等が照準を自分に向けるよりも先に撃ち殺す。四十発の弾丸を撃ち切り、胸ポケットから弾倉を取り出して弾丸の補充をしておく。

今さつき倒した二人のうち、一人が自分と同じウージーを持っていた。もしやと思い、彼の所持品を探ると、換えの弾倉が出てきたので頂いておく。

黒谷は周囲の様子を探ると、無数の足音が至る方向から聽こえてくる。どうやら先程の奇襲で、敵側に自分の居場所が割れてしまつたのだろう。

「…………どうする。黒谷」

「この場にある物、状況、自身の身体能力を考慮した上で、何か手はないか考える。

確かに、一対多数の場合。ランチエスターの弱者戦略を活用できる筈だ。

狭い場所に逃げ込み、一対一の状況を作り出す事が勝利への近道なのだろう。

「いたぞ！ こつちだ」「オペレーション で敵を狙い撃て」

黒谷は敵から逃げるよう逃走を始めるが、的確な判断で逃げ道を防いでいく。

大通りを走るのは危険だと判断し、建物と建物の僅かな隙間を見つける。迷うことなく隙間へと飛び込むと、いまさつき自分が居た場所に銃弾の雨が降り注ぐ。

手に汗握る恐怖を感じながら、走る速度を一層に早め、向かいの塀を乗り越える。

だが。

誠に運の悪いことに、塀の向かい側に偶然にも通り掛かった敵の姿があった。

一早く黒谷の姿に気が付くと、散弾銃のイズマッシュ・サイガ12を向けた。

( ヤバッ )

咄嗟に腰のファイアセブンを引き抜き、相手に向けて構えると、同時に引き金を引く。5・7? 弾が着弾する直前に、相手の散弾銃が火を噴いた。

無数の破片が発射され、僅かな距離を詰める。

黒谷は覚悟を決め、両手をクロスして頭を覆った。

全身血塗れ状態で黒谷は、背中を壁に預けていた。

弾丸の大半が腹をめり込み、一部は突き破っている。あまり傷の大きさで痛覚が麻痺しているのが幸いなのだろう。止血剤で血は止めたが、大量の血を失ったことで目眩が襲い掛かり、平衡器官に異常を来している。こんな状態で敵に見つかれば……

瞬間、目の前をひとつ影が横切った。その主は一度通り過ぎようとしたようだが、黒谷の存在を認めるか、足を止めてこちらに振り向く。

「 見つけた 」

口が三日月のように吊り上がり、慢心の笑みを浮かべていた。

そいつは仲間を呼ぶことをせず、ゆっくりと一步を踏み出しながら近付いてくる。

その悠長な時間が恐怖心を刺激していく。手に持ったCN75S

P 0-1が鈍く光る。

追加マウントプロックにはバヨネットナイフを装着したタイプであるらしい。

そいつは俺の首を掴み、ナイフへと近づける。ナイフの照準を俺の右眼に向けると、勢いよく振り落とした。

「がああツア、アツ」

言葉にならない激痛が全身を駆け抜け、大量の血液が飛び散った。瞳が発熱源であるかのように熱を発し、次第に熱は全身に回っていく。

「もつとだ。もつと苦しめよ。命乞いしてみせりよー。僕の両親はお前に殺されたんだ。両親と同じ痛みを受ける。報いろ。報いろよ何度もナイフを俺の身体に突き刺し、その度に血が飛び散り、ナイフは真っ赤に染まっていた。

俺は朦朧とする意識の中、もはや声すら發せられない状態へと追いやられていた。

そんな俺の状態を認めたのか、そいつは俺の頭に銃口を押し付ける。

「死ね。犯罪者め」

銃声が鳴り響き、意識が暗黒の世界へと墮ちていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9573z/>

---

Aggressive War

2011年12月29日22時48分発行